



井伏鱒二集

現代日本文学
1

現代日本文学 1

井伏鱒二集

昭和五十四年三月三十日 発行

著者 井伏鱒二
いふせ ますじ

発行者 関根栄郷

発行所 株式会社 筑摩書房
東京都千代田区神田小川町二ノ八

電話 東京二九一七六五一(営業)
二九四一六七二(編集)
振替口座 東京六一四一二三番
郵便番号 一〇一一九一

印刷 株式会社 精興社
製本 矢嶋製本株式会社
装幀 庫田 翠

井伏鱒二集 目次

かるさん屋敷……………五

漂民宇三郎……………九〇

二つの話……………一八〇

引越やつれ……………二〇三

普門院さん……………二四〇

お島の存念書……………二四六

片棒かつぎ……………二七二

吉凶うらなひ……………二八一

犬の仔……………三〇五

安土セミナリオ……………三二〇

白鳥の歌……………三三二

貝の音……………三三八

子熊の夜遊び……………三六八

開墾村の与作	三六
釣場	三六一
下足番	三六七
街道記	三七三
「奥の細道」の杖の跡	三七三
ささやま街道	三七七
久慈街道	三八六
甲斐わかひこ路	四〇六
井伏鱒二論	四八
解説	四三
	武田泰淳
	浅見淵

井伏鱒二集

かるさん屋敷

サンタ・マリヤ

織田信長の家臣に、馬廻の侍で菅屋治郎作といふものがゐた。生れは、尾張那古屋。信長よりも十一歳の年長である。

この者は、弱年のころ信長の父信秀に仕へ、天文十五年より後は信長に仕へた。翌十六年、三河大浜の侵略には、それが初陣の信長のお供をして、永祿元年、尾張品野の城攻めにもお供をして、敗れいくさで引きあげるとき、脚力が入並はづれてすぐれてゐるのを信長に認められた。退く合図があると、殿軍にありながら、治郎作は人のうしろから駆けぬけて真先に逃げ帰つたのである。

「さてさて其方は、韋駄天の神だ。惜しいことに、もし、其方が馬に生れてゐたら、かくれもない逸物であつたらう」

信長は城に逃げ帰つてから、大勢の前でさう云つて治郎作をからかつた。

爾来、治郎作のことを同僚たちが「逸物治郎作」と呼ぶやうになつた。

永祿三年、逸物治郎作は桶狭間の合戦にも信長のお供をして、そのときには、組頭の云ひついで服部小平太の介抱をさせられた。小平太は、今川義元に槍の柄を切り落され、膝に一と太刀あびせられてゐた。

その後も治郎作は、信長の出陣するたびにお供をしたが、とくに小賢い働きをしたといふやうなことは一度もない。ずるく拾ひ首をして来たことさへもないのである。普段でも、ごく目立たない仕へぶりであつた。だから、禄高を減らされないだけのことで、身すぎ世すぎで生殺戒を犯すお供をしてゐたやうなものである。こんな侍には、青春の侍ざかりの思ひ出にも乏しいだらう。気転のきく同僚たちの目には、逸物治郎作は若武者よりも駆けることが速いので、それだけのことを誇りにして、ずっと年下の足軽と同格で甘んじてゐるかのやうに見えた。

信長は、治郎作のことなど眼中になかつたやうである。ところが、天正三年の長篠合戦のとき、治郎作の面目をほどこすやうなことを信長が云つた。

「治郎作を呼べ。治郎作は、さながら木曾川筋の彌次だ。矢だまの下をくぐつての火急の使ひ、彼奴めに限らう。いまに敵が、推太鼓にて攻めかかつて来る。いま、その寸前だ」

治郎作が信長の前に罷り出ると、信長が云つた。

「この書状をば、先鋒の羽柴藤吉郎がところに行つて行け。急ぎの書状によつて、とくに其方

に申しつける。大事な書状ぞ」

「畏りました」

「藤吉郎は、敵に向かつてすぐ川の手前、柵矢来のうちにをる筈ぢや。そこへ辿りつくまでに、往還を行くと川が一つある。崖を兩岸に持つた深い川だ。その川の橋をば落してある。そこまで馬で乗りつけて、そこに馬を棄て、あとは、其方の真骨頂、韋駄天で行けえ」

「畏つて御座る」

書状の一つは、信長から先鋒の藤吉郎に宛てた火急の要信であつた。さきほど、誰か藤吉郎の陣のことで本陣に告げぐちするものがあつたので、信長が烈火のごとくに怒つて書いた書状である。

いま一つの書状は、堺の豪商、野々村宗伴から、陣中の藤吉郎宛てに飛脚で届けられたものである。

この野々村宗伴といふ豪商は、南蛮人と交易の手づるをつかむため、大坂石山本願寺の宗旨を逃れて伴天連門徒になつてゐる。南蛮船の船頭にも三四人の知りあひがある。先般、信長は藤吉郎に命じ、南蛮種馬や海戦道具その他のもの購入の件を、宗伴に依頼した。信長としては、多年仇敵の石山本願寺を攻めるため、それらの海戦道具を必要とする。いはば、宗伴は織田家へ武器を供給する出入り商人である。さもなくば、この戦陣のさなか、幾らついでとはいへ、町人の書状のごときで家臣を煩はす信長ではない。

宗伴の書状の表には、

「柳營さま御陣所内、羽柴様へ飛札——堺にて、トガルマ久右衛門拜書」と書き、その左手の肩に、「御生救ひぬし御生誕より一千五百七十五年、御宇内にては天正三年三月十四日」と書いてあつた。

堺のトガルマ久右衛門、すなはち野々村宗伴である。トガルマは、云ふまでもなく伴天連門徒の宗伴の洗札名である。

治郎作は書状二通を兜の内側に入れ、信長近侍の馬を借りて踊躍出発した。川を渡るときには、信長の云ひつけ通り馬を乗り棄てて、先鋒の藤吉郎の陣所へ向けて駆けつけた。

まだ夜は明けてゐなかつたが、夜前からの雨が止み、星明りで羽柴秀吉の殿軍の一部を見つけることが出来た。そこには、槍持ちの足輕が馬のわきに控へてゐた。

「それに來たは、何者ぢや。何用ぢや」と治郎作は咎められた。

「本陣よりの、火急の使者で御座います。柳營様の馬廻、菅屋治郎作と申します」

「なに、本陣からのお使ひか。さうあれば訊ねるが、薫巢山の方角の火の手は、何ごとか」

さきほどから、敵地の遙か後方で、山の麓に火事のやうな明りが見えてゐた。

「わたくし、ただ、書状を持つた使者で御座るさかい、火事のことば存じませぬ。どなた様かに、おたづね申します。羽柴様は、いづれに候」

「御大將は、柵矢來のところに出張つて御座る。御大將に御用あらば、あの火事の見える、あの方角を目あてに、まつすぐに行き候へ」

「忝う御座る」

治郎作は、その方角に向かつて駆けだした。間もなく、前方に立ち並んでゐる柵矢來が、星明りで見えた。

その柵矢來の材料は、丸太や角材など種々さまざまである。これは信長の布令で、岐阜出陣のとき配下の三万余の兵が、一人につき一本ずつ持つて來たものである。

柵の杙は土に深く打ちこんで、さらに根元を盛り土で固め、馬が飛び越せないほどの高さにされてゐた。三十間おき、または五十間おきに、味方の兵の出入りする木戸も設けられてゐる。矢來の長さは、十余町に及ぶと云はれてゐる。

矢來の内側には、味方の銃卒たちが、窪み穴に忍び打ちの恰好で構へ、しんとして鳴りをひそめてゐた。銃卒たちは火繩の火を前方の敵に見せないやうに、鉄砲の尻を穴のなかに入れてゐた。いまにも火蓋を切らうとしてゐる気配である。それでもまだ、そこかしこで杙を打つ音がきこえてゐた。

「おたづね申します。わたくし、本陣より参つた飛脚で御座る。馬廻の菅屋治郎作で御座る。羽柴様には、いづれに御座る」

一人の銃卒に治郎作がきくと、

「あしこぢや。あしこで、人夫仕事の杙打ちして御座る。御精の出すことよ」

と他の侍が云つた。

そこかしこに、杙を打ちなほしてゐる鎧武者がゐた。それが、東の空のわづかな明るみで、おぼろげながら見ることが出来た。すぐ近く、柵のところに身動きしないで立つてゐる鎧武者もゐた。二人の鎧武者が数だたみのかけに駆け

て行き、繩が何か束ねたものを引きずり出して來るのが見えた。どれが藤吉郎だかわからない。「あれが、羽柴様であらうか。矢來の傍にお立ちの、あの人影であらうか」

「なんの、あれは鉄砲組頭ぢや。御大將は、あれぢや。あしこで、杙を打ちながら下知して御座る人影ぢや」

その人影は、槌を振りあげる手を休めて、ちやうど大きな声を出したところであつた。

「おうい、お吉、これしきでは、まだまだ脆いぞ。敵めが、馬の蹄にかけをつたら、ひとたまりもなからうぞ。おういお次、おい、突つかひ棒のぐらつかぬやう、一つ一つ繩の結びめを見たまはれ」

たしかに、治郎作の聞き覚えてゐる羽柴藤吉郎の声であつた。かつて治郎作は、藤吉郎の同輩として同じ足輕組頭の下にゐたこともある。

「おうい、お次、お吉。みんな一同に云うて、ぐらつく箇所を、繩にて締めなほさせよ。きりぎりし、締めて行け」

「心得ました」

お吉、お次は、いづれも小姓たちの省略された呼び名である。

藤吉郎は再び枕打ちに取りかかった。

治郎作は、お吉のところに行つて名前を告げ、藤吉郎への取次ぎを頼んだ。

「畏りました。御苦労で御座る。暫くお控へ下され」

お吉といふ小姓は、声交りのしかけてゐる声で治郎作に云つた。

「御使者には、盛り土のかげか、窪み穴にお控へあれ。ここは、矢来に向うより敵の狙ひうちが御座すけに。とりわけ、あの辺りの、藪だたみのかげの敵に、心して下され」

「はア、心得ました」

「夜前も、ちやうどこで、足輕衆が二人、敵に狙ひ打ちされました。ここは危う御座すけに、いざ、お伏せあれ」

「心得ました」

このあたりには、矢来の向うにも、こちら側にも、背丈けにあまる笹や灌木の茂みが散らばつてゐる。敵の前哨が忍んで狙撃するには、持つて来いの茂みである。それでもお吉は、弱年ながら悠々と藤吉郎の方に歩いて行つた。正面、遙か向うの山裾には、火事のやうな火が、いつの間にかまた一つ殖えてゐた。

治郎作は、杓の根元の盛り土のかげに身を伏せた。すぐそばの窪み穴に、味方の銃卒が一人ゐた。つるりとした鉢金の兜をかぶり、鉄砲を小脇にして、盛り土に肘をついてゐる。その銃卒が、ひそひそ声で治郎作に話しかけた。

「なう、御馬廻の衆とやら。あの向うの火は、

何の火であらうかの。長篠のお城に、もしや、甲州勢が火を放つたのでは御座るまいか」

「左様、そのことぢや。はて、何の火であらうな、異なものぢや」

「げに、長篠のお城が落城なら、敵が関の声をあげるさかい。さすれば、敵の先鋒も、その関の声に応じるさかい。お手前、それをお聞きあつたらうか」

「いや、一向に」

よほど暫くたつて、さつきの小姓が治郎作を呼びに戻つて来た。

もはや藤吉郎は、馬印を立てた幔幕のなかに引きとつて、牀几に腰をかけてゐた。大勢の鎧武者がその左右に控へてゐた。

治郎作は、藤吉郎の前に出て行くと、書状を取りだすために兜を脱いだ。その顔を、藤吉郎が見覚えてゐた。

「おお、まぎれもない、逸物治郎作ぢや。なつかし、なつかし。久濶であつた」

「はッ、久濶にて御座る。さて、ただいま柳宮様の仰せにて、この書状二つ持参いたして御座る」

「御苦労であつた。確かに、拝受候。こなた、暫く待て。上様へ御返書、差しあげるやもしれぬ」

藤吉郎は、信長からの書状をひろげると立ちあがつて、それを夜明け前の東の空に高々と透しながら云つた。

「上様には、さてさて、お心づかひ遊ばされる。

空明りでも読めるやうに、薄い紙に、大きな字でお書き下された。かたじけなし」

ふと藤吉郎は、ふらふらと二三歩前に進み出て、やはり書面を空明りに透しながら云つた。

ただならぬ語調である。

「はて、心得ぬ。白山権現も照覧あれ……」
羽柴藤吉郎は傍の小姓を見て、いきなり激しい語調で云つた。

「やい、お吉。柵矢来の繕ひ、もう為な。上様の仰せである。即座に、止めさせよ」

「心得ました」

その小姓は幔幕の外に出て行つた。

藤吉郎は、いま一人の小姓を見て、頭から嚙みつくやうに云つた。信長からの書状に、いたく刺戟させられた風である。

「やい、お吉。夜前、わが手の鉄砲足輕、三四五人して矢来の外に出て行つたげな。敵の忍びの兵を追うて、あとを慕つて行つたげな。その事の次第、詳しく上様が書状に仰せられてある。なほまた、あらうことか、矢来の繕ひ手の者三四五人、槌をふりあげて共に追うたげな。由々しき振舞ぢやぞ。そのざまを、其方は見ざつたか」

「いえ、存じませぬ。噂にも聞きませぬ」

「味方の鉄砲足輕ども、いつさい、矢来の外に出ることならんのだ。このこと、軍議において定められてある。全軍一同、この説、とくと心得てをる筈だ」

「御意に御座います」

「このこと、きつと、鉄砲組頭に云うて聞かしておけ。なほ、組頭より足輕一同にも告げさしておけ。このたびは、専ら鉄砲にて決戦一番の覚悟、みな五臓六腑に浸み入らさすやうにさせるのだ」

「心得ました」

その小姓は、幔幕の外に出て行くと、若武者の派手ごのみで、草摺を一枚つかみあげて駆けだした。

東の空には、まだ薄ら明りが射してゐるだけである。藤吉郎は空を見てゐるが、ふと治郎作の方に目を向けた。

「なう、逸物の治郎作。上様へ御返書の儀、いま其方の見た通り、思つた通り申し上げる。この藤吉郎、筆不精するのだから」

「御意に御座います。御返書なされましますしても、まだ明けぐれ前、薄ら明りで御座るさかい」

そこへ慌しく一人の若武者がはいつて来て、

藤吉郎の前に跪いた。

「申しあげます。ただいま、極楽寺山の御本陣に、烽火二筋ありました」

「二筋か。さうあれば、みなみな、よく聞けや。やがて目の出よう、敵をあざむき寄せる駆引きが始まらうぞ。敵は、必ずや推太鼓にて、遮二無二かかつて来る。味方は、かねて申しつけたるごとく、一万挺の鉄砲のうち、三千挺づつ交るがはる打ちかけるのぢや。畏れながら上様には、このたびは、鉄砲足輕にて敵に会釈させろ

と申された。また上様は、このたびこそ敵を練雲雀のごとくにせんと仰せられた。このお言葉、みなみな、五体のうちに浸み通せ。骨の髄まで浸み通せや。いざ、行かん。敵を、練雲雀のごとくせん」

四五人の者が、呪文をとなへるやうに、「敵を、練雲雀のごとくせん」と口々に云つた。

日の出までには、余程まだ時刻の余裕がある。それでも、羽柴藤吉郎は陣列に着くために、幕僚を引きつれ山裾寄りの高台の方に向けて出発した。その馬印は、色だけ派手な何の妙味もない瓢箪の寄せ集めだが、ひとたび野外に持ち出されると、薄ら明りにも堂々たる風骨を見せた。威風、あたりを圧してゐるやうであつた。馬は含みぐつわを着けられてゐた。

治郎作はその出陣ぶりを見とどけて、いま来た藪だたみ沿ひの小道をたどつて引返した。すると、一発、また一発、近くで銃声がした。

「やい、やい、何者ぢや」

と大声で咄めるのがきこえた。

声がするのは、櫓矢来の方角だが、治郎作は藪だたみのために視界を遮られてゐた。

「やい、やい、そこに筒音させたは、何者ぢや。御法度を破りをつた曲者、何者か名のれ。いづれの者どもぢや」

「先鋒へ何かと急ぎの、小荷駄組の者どもにて御座る。いま筒音させたは、名無しの太郎冠者、次郎冠者の両名にて御座る」

「やい、やい、何とぬかす。これは先鋒見廻り

の検使である。筒音させたる曲者両名、逃がすな、搦めとれえ。いま、取り調べにそれへ参る」

「いや、これには仔細が御座る。内聞にお見のがし願ひます」

治郎作は、その声のする方へ駆けだした。藪だたみのところを抜け出ると、矢来のそばに、小荷駄衆と見える一組が見えた。槍や鉄砲を持つた雑兵と、荷物を積んだ馬がゐた。その組頭の背の旗指物は、白布に黒字で書いた十字である。それが東の空の明るみに透けて見えた。いはゆる伴天連門徒の十字架じるしの旗である。

その旗じるしの組頭と、先鋒見廻りの検使が向かひあつて立つてゐた。そばに、矢疵を受けた一人の足輕が倒れてゐた。血の吹き出る足首の疵口に、介抱の者が藥を塗りつけてゐた。手負ひは、ここへ担ぎこまれたものと思はれる。この場所は、特に高い盛り土を控へた二十疊敷きほどの窪地である。

検使の鎧武者は、厳格な語調で、十字架じるしの旗指物をした組頭に掛合つてゐた。

「さうあれば、名無しの太郎冠者次郎冠者両名を、早々に搦めとり候へ。ここにては、てんでんに発砲すること、上様よりのお達しにて御法度ぢや。みな、固く心得てをらざアなるまいぞ」

「御意、御意」

「さらば、曲者両名を、早々にこれへ突き出し候へ」

「次第御尤もながら、これなる手負ひの足輕、敵の錆び矢にかけられました。その仇討たずはと、名無しの両名、咄嗟に鉄砲の火蓋を切りまして御座る。して、私こと軍事多用、ほどほどに願つてここ罷り通る」

やうやくにして夜が明けて来た。

十字架じるしの旗指物をした組頭は、真新しい紺糸をどしの具足をつけ、星兜の真向に可愛らしい銀の十字架をつけてゐた。この南蛮風の飾り立ては、このごろ伴天連門徒の武士たちのする流儀である。彼等の身だしなみの一つである。

矢疵を受けてゐる足輕は、粗末な古めかしい具足をつけ、やはり兜の真向に、同じやうな恰好の十字架をつけてゐた。

先鋒見廻りの検使は、かんかに腹を立ててゐた。自分の草摺を、発止とばかりに軍扇で打つた。相手の組頭に云ふ言葉も苛立つてゐた。

「御辺が異教の旗じし、われらにおいては見覚えもある。御辺、河内の三箇殿が家中の者と見た。いかにも、さうあらう」

「御意に御座る」

「御辺の苗字名前、いづれ、上様のお耳を穢すものと覚悟あれ」

「心得ました」

「さうあつても、げに、お通りあるか」

「いかにも」

「たつて、罷り通るとあらは、お通りあれ。ただ、名無しの曲者両名、ここへ残してお通りある

れ」

「畏つて御座る。いざ、者ども通れ、通れ」

人馬が動きだした。

十字架じるしの組頭は、矢疵を受けてゐる足輕を、他の足輕に背負はせた。その手負ひの両足を、うしろから別の足輕が折り曲げて支へた。

「左様ならば御検使、まづば御免あれ」

その十字架じるしの組頭は、検使に呼びとめられた。

「いや、これこれ。曲者両名を残してお通りあれ」

「両名のもの、あしこの矢来の外に打ち伏し、すでにこと切れて候」

「なに、あれは敵の足輕ぢや」

「疑はしくは、むくろを実検あれ。太郎冠者次郎冠者は、あのむくろで御座る」

「あれは、御辺の足輕が手にかけてし、敵の雑兵ぢや」

「いやいや、あはれなるかな、それがし家来の、むくろである」

十字架じるしの組頭は、家来の死を悼むかのやうに、何やら呟きながら十字を切つた。

柵の外側で、五六十歩ばかり向うの藪だたみの端に、足輕風の者が二人、俯伏せに倒れてゐた。これが名無しの太郎冠者次郎冠者でないのは云ふまでもない。まさしく味方の足輕に矢を放つた敵の前哨で、太郎冠者次郎冠者とやうに、鉄砲で仇討ちされた敵の死体である。

だが、矢来の外であつてみると、敵か味方か

その死体を調べに行く手だてがない。このたびの軍律では、味方の先鋒は一兵たりとも矢来の埒外に出ることを許されない。例外は、味方の騎馬武者の集団に、敵の集団を誘きよさせる駆引のときだけである。

検使は、自分自身が雑兵たちの前で、愚弄されたと思つたのにちがひない。ふと、辺りを睨みまはして、ちやうど苦笑ひしてゐた治郎作を目にとめた。

「おお、呆れはてたる不法の行儀、うつとも見えぬ。もはや容赦せぬ」

さう云つて、づかづかと治郎作の前に進み寄つた。

治郎作は立ちすくんでしまつた。その鼻さきに、検使が軍扇を突きつけた。

「やいやい、足輕。汝に申しつける。矢来の外に抜け出で、あれなる死骸を、これへ担ぎとつて参れ」

「はア、わたくしが、矢来の外に……」

「いかにも」

「矢来の外の、むくろを担いで参れと、わたくしに仰せられますか」

「さうぢや」

「わたくし、菅屋治郎作と申す者にて、またの名を逸物治郎作……」

「いや、治郎作太郎作の差別はいらぬ。汝に申しつける。ただに担ぎとつて参れ」

その言葉を、十字架じるしの組頭が遮つた。

「御検使、畏れながら、それは御辺の取り間違

ひで御座る。この菅屋治郎作と申す仁は、わたくし組下の者には御座らぬ。もとより、河内三箇の武士には御座らぬ」

「それは、異な余所がたりを聞くものぢや。しからば、菅屋治郎作とやらに聞く。汝は、何故をもつて、河内三箇の足輕と共に、ここへは顔を見せをつた。嘘つくな、いざ担ぎとつて参れ。汝は腰抜け武士か、愚図々々すな」

「はア、心得ました」と治郎作が、開きなほつて云つた。「この菅屋治郎作、腰抜け武士と罵られた上は、千軍万馬の我が面目にかけても合点せざなりませぬ。軍規に触れようとも、たつて矢來の外に出て参る」

「いざ参れ」

「さらば、御免あれ」

治郎作が盛り土の外に駆けだすと、それを十字架じるしの組頭が、追ひかけて行つて声をかけた。

「暫くお待ちあれ。こなたの胸のうち、よく心得た。もはや、止めて止まらぬものと思ふ故、こなたの開運を祈つてつかはさう」

「かたじけなう御座る」

矢來の外には朝霧が立ちこめて、そこかしこの藪だたみが薄ぼんやり見えてゐた。その藪だたみのかげには、どこに敵が身をひそめてゐるやらわからない。そこへ踏み出すのは、むざむざ死地にとびこむやうなものである。

十字架じるしの組頭は、治郎作の真近かに寄つて心もち頭を垂れ、胸に十字を切つて、何や

ら口のうちに奇妙な文句を呟いた。

敬虔の念をそられる姿である。

それを不思議さうに見てゐた治郎作は、すぐに好奇の目を光らせて組頭にたづねた。

「畏れながら、御組頭様。いま、お口のうちに、何やら仰せありました。何と仰せありましたか、お明かし下され」

「されば、あの矢來の外は、『一とあし踏み出で死出が原』とか、足輕ども云うてをる。それにつけ、いま呪文を唱へて、こなたの武運を祈つてつかはした」

「かたじけなう御座る」

「いまの呪文は、靈驗あらたかに、これを唱へる者には、鉄砲だまも退けて通るさうな。宗徒の有難い呪文ぢやと思へ」

「何と仰せられます」

「宗徒と云ふは、すなはち日本口にて、伴天連門徒のことよ。呪文の文句は、おお、ゼスス・キリシテ……」

「おお、ゼスス・キリシテ……」

「サンタ・マリヤ……」

「サンタ・マリヤ……」

「呪文の文句、順序つけて云うてきかせよう。御身も覚えるがよい。——おお、ゼスス・キリシテ、サンタ・マリヤ、サンチャゴ」

「はて、サンタ・マリヤの次、何と仰せられます」

「サンタ・マリヤ、サンチャゴ」

「サンタ・マリヤ、サンチャゴ」

「サンタ・マリヤ、サンチャゴ」

「サンタ・マリヤ、サンチャゴ」

「さうだ。ゼスス・キリシテ、サンタ・マリヤ、サンチャゴ、その三神ぢや。みな、靈驗あらたかな、南蛮の神だと思へ、加護の恵みを垂れ給ふ」

「かたじけなう御座います」

「サンチャゴは、いくさの神にて、南蛮の摩利支天ぢやと思へ」

「わたくし、三神のうち、どれか一つだけ覚えさして頂きます。この急場、一段と覚えにくう御座るさかい」

治郎作は「サンタ・マリヤ、サンタ・マリヤ……」と呟いた。

「菅屋治郎作、首尾を祈るぞ。抜かるな」と十字架じるしの組頭が、治郎作を激励した。

「心得ました」

治郎作は身を低くかまへて、矢來の外に出て行つた。その行手に、藪だたみのかげから敵の前哨が三人現れた。おそらく彼等は、治郎作が死体を担ぎ取りに來たと思つたに違ひない。三人協力して死体を庇ひ、いづれも太刀を引き抜いて治郎作に打つてかかつた。

治郎作も太刀を抜き、

「サンタ・マリヤ、サンタ・マリヤ、サンタ・マリヤ」

と大声で、敵を威嚇する鬨をあげた。

闘ひは一人に対して三人だが、見るまに、治郎作は敵の一人を斬り倒した。つづいてまた、

一人を斬り倒した。あとの一人は、腕に一と太刀あびせられ、藪だたみのなかに逃げこんだ。

治郎作の手練は大したものであつた。

矢来のこちら側で、十字架架るしの旗をさした組頭が、

「やあやあ、でかした。菅屋治郎作、でかした。サンタ・マリヤ、サンチャゴ」

と喚声をあげた。

この伴天連門徒の組頭は、すでに治郎作に多大な好感を見せてゐた。その反対に、検使の方は治郎作に苦々しげな目を向けてゐた。

治郎作は血刀をぬぐつて鞘にをさめると、矢来の方を見て大声に呼ばはつた。

「御検使様に申しあげます。ここに倒れてある屍は、河内三箇の兵で御座います。まぎれもなく御味方の兵にて御座います」

「やいやい、汝は血迷つたか。汝は、おのれの使命、忘れたか」

「何と仰せられます」

「その屍、早々にこれへ持ちこめえ。そのため、汝を矢来の外に差し向けたのぢや。その屍、これへ持ち来ずは、嚴重な仕置きである」

「止むを得ぬ仕儀で御座る。かくなる上は、わたくしこと、この戦場より逐電させて頂きまする」

「何と申す。矢来の外にゐるとで、つけあがるか。検使を愚弄の一件、許しがたし。これへ参れ」

「いえ、わたくしこと、逐電させて頂きます。これにて、御免つかまつる」

「やいやい、逃がさぬぞ」

治郎作は敵の遺棄した槍を拾ひとつて、それを手並あざやかにしごいて見せた。しごき終ると槍を立て、今度は十字架架るしの組頭に声をかけた。

「河内三箇の御組頭様に、申しあげます。御家来衆の屍、無慙ながらも、これに曝し置きます。南無阿弥陀仏……。左様ならば御組頭様、御免あれ。御機嫌よろしう」

治郎作は一礼して槍を肩にかつぎ取ると、あらぬ方角へ一散に駆けだした。その行く手は、味方の陣も敵の陣もない沼地の方角のやうである。沼の手前には伊奈街道が通じてゐる。身をかくすに都合よく、藪を兩岸にひかへた細川も流れてゐる。

「やいやい、慮外者め。返せ、戻せ」
 検使は躍起になつて喚いた。

「おうい、治郎作とやら、返せ、戻せ」
 大声で喚いたが、もう治郎作の後姿は、朝霧のなかに隠れてゐた。無論、矢来の埒外のこととて何といたす法もない。軍規によつて、誰も矢来の外に出てはならぬのである。

「おうい、おうい、返せ、戻せ」
 検使は矢来に沿うて駆けながら、霧のなかにかくれて行つた。

霧が、ますます深く立ちこめて、ついでに検使の体面を保たせたやうなものである。雨後の夜明けにしても、ものすこいほどの霧であつた。十字架架るしの組頭は、駄馬をひく足輕の一隊を進発させた。

この組頭は、まだ年が若い。隊の先頭に立つて道を急ぎながら、お供の老臣忠七に話しかけた。

「なう忠七。先づ、虎口を脱したぞ」

「はア、一時は、類なく、すげなう御座いました。わたくし、ひたすら、天主の御加護を念じましたと思召せ」

この老臣も、兜の真向に十字架の飾りをつけてゐた。

「なう忠七。げに、あの菅屋治郎作なる者の気性、我等の氣に入つた。ましてや、敵を一と太刀に打ち斬つた、あの手なみはどうだ」

「無類の手練で御座います。また、あの治郎作と申すお方、至つて仁者で御座います」

「あのやうな兵法仁こそ、文武二道人と思へ。曰く、兵家の云ふ、兵法通達の人ぢや。水を踏むこと地のごとく、地を踏むこと水のごとし。左様な者でなくては叶ふまい」

「御意。サンタ・マリヤの御加護も然りながら、電光石火の早技、天狗様のごとき働きで御座つた」

「また、うるはしげな気性、掬すべきものであつた」

「おかげをもつて、御家来衆の両所、成敗をまぬがれました」

「いかにも。信長公の万機厳然を、とてもこの目のあたりに見せられた。一とあし踏み出て死出が原……。あの落首が出来たも尤もだ。矢来の高さ、五尺なにがしにすぎないが、百尺二

百尺の櫓矢来の化者だ」

「はて、唐国は万里の長城とやらも、かやうな矢来でがな御座いませう」

この小荷駄組の一隊は、目的地の山裾の陣所に到着した。馬の背の荷物は、陣所の受取役が数取りに調べながら取りおろした。

荷物の引渡しがすむと、小荷駄組の者は林のなかに行つて腹ごしらへに取りかかった。

この陣所の近く、矢来の尽きた左手に當つて、岡の上に屯してゐる味方の一隊が見えた。

岡は丸山といふ。その岡の上から、一人の騎馬武者が駆け降りて、敵のゐる方角に向け、矢のやうに突き進んで行つた。その姿が、渦巻く霧の切れ目に見えがくれた。

十字架じるしの組頭は、側付きの年寄りに云つた。

「忠七。おつつけ、朝日が昇らう。見てあれ。

いまに兩軍、火花を散らさうぞ」

「はア、わたくし、胸鳴りして候」

「あの岡の上の陣が、一番駆けを承つたに相違ない」

「御意。あの御陣所は、一ときは色めき立つて御座るけに」

さつき駆けだして行つた一騎が引返して来て、その岡の上に駆けあがつた。

岡の上にある部隊は、敵を誘ひ寄せる任務を持つ一番手の佐久間隊である。そろそろと岡の麓に降りて来て、関の声と共に、霧のなかに突き進んで行つた。敵の陣太鼓の音がきこえだした。

た。それに混つて関の声がきこえ、次第に太鼓の音が近づいて来た。

十字架じるしの組頭は、側仕への老い武者に云つた。

「あの太鼓の音が、信玄このかた、甲州者の自慢の種か。さてさて、何の交番もなさうだ。なう忠七」

「左様で御座います。古里の日蓮寺で叩く太鼓に似てをります」

「それであつて、あの太鼓が曲者ぢやと思へ。あの推太鼓の音と、甲斐武田の御旗無賴も照寛あれといふ合言葉が、敵に徒らな軍をさせるのだ」

「おお、味方が駆け戻ります」

霧のなかに味方の武者が、三騎、五騎、十騎と見えて来た。その姿は、白い霧のなかに灰色の影絵のやうに見えた。つづいて、二十騎、三十騎と逃げ帰つた。そのあとから敵の集団が追ひかて来たが、案外にも矢来の前を避け、佐久間隊の陣所を攻めとつた。

敵は新手を繰り出して、今度は矢来に向かつて攻め寄せて来た。朝日が出て、今まで霧のなかで灰色に見えてゐた騎馬武者が藍色に一変して、その輪郭が金色に光りだした。空中全体が紫色に着色されて見えた。

「さてさて、勿体ない……」

と十字架じるしの組頭が呟いた。

そのとき、突如として大きな音がした。忍び打ちに構へてゐた味方の足軽が、千挺の

鉄砲で一せいに火蓋をきつたのである。つづいてまた、千挺で打つ大きな筒音がした。敵の集団は、半分ほどに打ち減らされた。

敵は新手を加へ、入れかはり立ちかはり遮二無二、推太鼓で攻め寄せて来た。

味方は信長の作戦にしたがつて、鉄砲足軽で会釈させ、櫓矢来の外には一兵も出さなかつた。ただし、逸物治郎作だけは別である。

この戦闘は、日の出から未の刻まで十時間つづいた。敵は総人数約二万のうち、逃げ帰つたものは、総大将の武田勝頼以下三千にすぎなかつた。味方の死傷は六千に達した。稀代の激戦であつた。

味方の討死のうちに、取るに足りない雑兵だ

が逸物治郎作の一人息子ゐた。これは軍奉行前田利家の組下にて、流れ弾で陣没した。治郎作当人は、合戦後六箇年のながい年月にわた

り、どこに逐電して行つたのかその行方が杳として知れなかつた。実は治郎作こと、和泉に逐電して六年間も砂川の寺の納所坊主に化けてゐ

たが、折りから和泉の検地に来た堀秀政の家来に見つけられた。治郎作は軍規違反の大罪人として秀政の面前に連れ出され、秀政はそれを信

長の前に突きだすため安土に連れ帰つた。

おそらく治郎作は、極刑に処せられるだらう

といふのが、秀政の予想であつた。

竜舌蘭

信長は逸物治郎作取調べのため、長谷川竹丸と野々村三十郎を担当の奉行にした。

治郎作の軍規違反の件は、長篠役がすんだ後日にも噂のたねになつてゐた。引合人のうちに高格な武士もゐることだが、治郎作の逐電の仕方が聊か風変わりであつたので、この噂は信長の耳にも入つてゐた。もし治郎作が搦めとられたら、火あぶりの刑になるだらうといふ噂であつた。

取調への両奉行も慎重を期し、証左を正確に求めるため、長篠役で例の十字架じるしの旗指物をしてゐた三箇の組頭にも、問合せの使者を差向けた。

この組頭は、白井伯耆守の二男、伴天連門徒のテモテ玄九郎である。いはゆる三箇の城主マシヨ白井殿の実弟である。この三箇では、伯耆守をはじめ足輕に至るまで伴天連宗の信徒が多い。宗門入りの百姓たちの頭数を合はせると、信徒の数は五千人余にも及んでゐる。

テモテ玄九郎は、使者の用命を承はると、事の次第に驚いて急いで安土に向うことにした。無論、長谷川、野々村の両奉行に、かつて仁俠の逸物治郎作の命乞ひを願ひ出るためである。証人たる老臣忠七なども連れることにした。

出発の支度をととのへると、玄九郎は、兄の館へ旅立ちの挨拶に出向いて行つた。

兄のマンシヨは、以前、父の伯耆守が三好党に荷担した罪で、信長から取調べを受けた経験もある。そのとき明快に申開きが出来たので、マンシヨは信長から却つて加増を受けた。信長の気象も多少は知つてゐる。それで弟の玄九郎に云ひ寄せた。

「話が、多岐に渡らぬやうに心がけることだ。御奉行の前にて、嘘いっはりを口に為な。よい

か、それこそは禁物だ。誓ひ候へ」

「はア、誓ひます」

「信長公は、罪科を憎むこと、人一層に強いお方である。豪快であられる反面に、万事、きれいい好きで、癪だ。たとへば、この机の上に水の滴が一つ落ちてをる。すると信長公は、その一滴の水も気になさる。お目通りかなつたら、嘘いっはりなく、胸中の披瀝一途を心がけるがよい。つくろつた言葉尻は、机の上にこぼれた水と思はねばならん」

「心得ました」

「いつかも云うた。信長公は、話のさなかにあつて、ふと大声一番お叱りなさることがある。それが、おそるべき大音声の、耳を聳するほどの大音声だと思へ。それに魂消て、こなたが言葉を濁してはならぬ」

「畏りました」

「安土への途次、京での泊りに南蛮寺へお詣りして、あのロレンソ殿といふ法兄弟にお目にかかれ。九国生れの半盲半開の琵琶法師だ。かねて当家先代も昵懇であつた。あのお人は、信長

公の御愛顧を蒙つてをられるので、何かの心得、教へて頂けるやもしれぬ」

兄のマンシヨ白井は、舍弟に門出の祈りをさせるため、机の上の燭台に手づから蠟燭の火をとばした。ちやうど日の沈む時刻とて、早くも侍女が丈け高の燭台を持つて来た。

玄九郎は身を清めるため庭に出て、略儀ながら寛の水で手を洗つた。口もすすぎ清めて部屋に引返した。

「兄上、寛の水しもが、紅葉席で堰きとめられてをります。溜つた遺水で、小池が出来てをりました」

「あの風雅は、月の末ごろ京から来る宗匠と、連歌興行するためだ。そのため、わざわざあのままにさせたのぢや。まさしく、秋色满地といふところだな」

「兄上、もうそろそろ、お庭の南蛮万年青を、霜囲ひせすはならぬと思召せ」

「なに、あの植物は霜枯れせぬさうな。霜囲ひせいでよいと、先頃、野々村宗伴が云うた。あれが、今年の宗伴が、あれを霜枯れさせう考へて御座います。枯れさすほどなら、いつそ切りするがよう御座います」

「いや、待て。あの南蛮万年青は、もとより当家に縁起のよいものでない。だが、切りするにも当るまい」

それでも、兄のマンシヨは気になるのか縁側に出て行つた。その軒下に近く、飛石のそば

に一株の竜舌蘭が生えてゐる。鋸葉が、人間の背丈けほどにも及ぶ大きさである。

舎弟の玄九郎も縁側に出て、この兄弟は暫く鬱陶しい顔で竜舌蘭を見た。これには聊かわけがある。

この竜舌蘭は、この館の先代が、將軍義昭の味方について京へ参覲を繰返してゐた当時、堺の豪商、野々村宗伴から贈つてよこした珍しい植物である。それを届けて来た宗伴の使者が、「これなるマンジュシャは、南蛮の飛領地は墨西哥国の生えぬき、珍木珍草十二種がうちの植木と聞て御座る」と物議り顔に云つた。南蛮では専ら珍重されてゐる植木だといふことであつた。

その当時、將軍義昭は信長から頭をおさへつけられてゐた。たうとう義昭はその境遇に厭き果てて、諸国の不平な大名や僧兵や豪商を糾合し、信長に謀反をたくらんでゐた。堺の豪商宗伴も義昭に招かれて、義昭に味方する大名たちに合戦道具を売りつける役得を与へられた。しかし、宗伴といふ商人は抜けめがない。旗色をはつきりさせないで、なるべく合戦道具でないやうな品物を、謀反人側の者に売つてお茶をにごしてゐた。しかも宗伴は、謀反人側の京畿の大名には怠らず献上品を届けてゐた。そのころ、三箇へ送りとどけられた献上品の一つにこの竜舌蘭があつた。現在、信長に服従してゐる三箇の白井兄弟には、いかにも氣づまりな思ひ出の植木である。

「兄上、あれを切りすてるやう、わたくしにお許しあれ」

舎弟のテモテ玄九郎はさう云つた。

兄のマンシヨ白井は、弟のテモテ玄九郎をたしなめた。

「あの南蛮万年青は、かねて我らが父上の御鍾愛になつたものではないか。しかも、父上は、いま追放流離のお身の上ではないか。南蛮伝来の詩の言葉にも、天涯の孤客、なほ家郷の蘭花を偲ふといふのがあるさうぢや。おぬし、その詩情を思はぬか」

「はア、兄上がその思召しで御座るなら、何してその蘭に、冬の霜囲ひなさいませぬ。兄上が霜囲ひするとお約束あらば、わたくしも、あれを刀で切らうとは申しませぬ」

「厳しいことを申すやつ。さうあれば、わが身、霜囲ひするに於て如才はない」

「忝う御座る」

おかげで、飛石のそばの竜舌蘭は、刀で刈りとられることを免れた。

この南蛮万年青は、かつて白井兄弟の父、白井伯耆守が限りなく慈しみ鑑賞してゐた植物である。夏の日は、伯耆守が手づから毎朝のごとく、これらの鋸葉の世話をやいてゐた。濡れ筆で懇ろに葉を一枚づつ隅から隅まで拭くのである。冬が近づくと、みづから藁と棕櫚繩で葉をくるんで霜囲ひをした。これも伯耆守としては、伴天門門徒の篤行の一つだと自負してゐたやうであつた。

いつか、三箇へ来た一人の南蛮人が、この竜舌蘭とそっくりのものが、一株マラッカの天主堂の庭にも植ゑて御座つたと云つた。それを聞いた伯耆守の感激は只ならぬものであつた。すなはち、マラッカの天主堂は、かつて天竺から日本へも御巡錫になつたハビエル聖人を、中興の祖と仰ぐ有難い靈場である。爾来、伯耆守はこの南蛮万年青には、家来どもの手を触れさせることも許さないやうになつた。

当時、伯耆守は三箇の城中下五千人の伴天連門徒の慈父と云はれてゐた。それが將軍義昭の謀反の企てるとき、前もつて家督を伴のマンシヨにゆづつて、父だけ義昭に荷担した。しかるに義昭は信長に惨敗した。信長は佐久間盛信に命じ、伯耆守父子を打首にさせようとした。盛信は三箇に出向いたが、殺すに忍びず伯耆守に「一と先づ身をかくすやうにすめた。マンシヨの方は京都に連れて行き、折から在洛中の信長に一身の潔白を弁明させた。」

この顛末について、堺にゐた或る南蛮人が、次のやうな概評をローマの知己に報告したといふことである。

「……かくのごとく動乱の打ちつづく日本では、諸大名の用ひる巧妙な策略の一例がここにある。すなはち、一家族が二つに分れ敵と味方の両軍に加はつて、戦後は一家のうち誰か必ず勝利者の側にゐるといふ悲痛な術策である。一方の戦功が他方の不首尾を償つて、その結果は不首尾の者も死罪を免れることがある。三箇の白井父